

菊池嘉晃著

## 『北朝鮮帰国事業』

——「壮大な拉致」か「追放」か』

磯崎敦仁

北朝鮮帰国事業は、1959年に開始されてから既に半世紀が経過し、いまや日朝関係研究における中心的テーマの1つになっている。10万人近くもの在日朝鮮人と日本人配偶者らが北朝鮮への移住を選択した理由については、同国と朝鮮総連の誇大宣伝によるところが大きく、そこに日本メディアと「進歩的知識人」が加勢したとステレオタイプの解釈されてきた。

近年この分野については、いくつかの注目すべき論稿が発表された。たとえば、テッサ・モーリス-スズキは、新たに公開された赤十字国際委員会所蔵文書を丹念に読み解いた（『北朝鮮へのエクソダス——「帰国事業」の影をたどる』朝日新聞社、2007年）。赤十字文献に着目した点は評価されるべきであるが、日本政府の責任にばかり注目がいっており、この事業の全体像を見渡せる論稿とはいえなかった。

そして、ここで取り上げる『北朝鮮帰国事業——「壮大な拉致」か「追放」か』の登場によって、ようやくバランスある議論が加わったとの印象が強い。ポスト冷戦期の北朝鮮研究において重要な新資料となっている「旧ソ連・東欧文書」と「脱北者・亡命者証言」の双方が検証対象になっているばかりか、わが国や北朝鮮の文献も旺盛に収集して

いる様子が窺われたからである。

本書の焦点は、「①帰国事業はなぜ行われ、北朝鮮、日本、韓国をはじめとする関係国の意図はどのようなものだったのか」、「②冷戦下になぜ10万人近い帰国者・日本人妻らが体制の異なる北朝鮮に渡り、帰国後の悲劇はなぜ生まれたのか」の解明に置かれ、次のような構成になっている。

序章 問い直される帰国事業／第1章

「在日社会」の激動——戦前～朝鮮戦争

／第2章 朝鮮戦争と帰国運動の始まり

／第3章 帰国実現の模索／第4章 帰

国事業をめぐる攻防／第5章 北朝鮮は

なぜ「帰国」を推進したか／第6章 な

ぜ「未知の祖国」へ渡ったか／第7章

なぜ「帰国」は四半世紀も続いたか／第

8章 「虚構の楽園」での悲劇／終章

現在進行形の問題

全体を通じ、限られた字数で問題全体を見渡しながら新事実を盛り込んでいる。各章リード文の問題提起はよく練られており、簡潔な小見出しや的確な比喩表現も読者の理解を促しており、読みやすい書となっている。

「日本国内でも、(北朝鮮の)収容所の存在を疑問視するか、あえて触れようとしない論者も多かった」との表現は真に辛辣であり、事実検証に基づいた批判を行おうとの宣言に

なっていた。金日成のシナリオに基づいて在日団体で帰国運動が始まったことを明らかにし、「北朝鮮への『大量帰国』に向けて最初に動き出したのは在日コリアン排除という『策略』を有した日本側だった」という既存の議論に真正面から疑問を投げかけた。日本政府に「厄介払い願望」があったにせよ、北朝鮮を美化する情報を流した形跡はなく、むしろ同国のマイナス情報を流していたことも明らかにしている。一方、日本社会でも貧困、朝鮮人差別、不安定な法的地位といった日本からのプッシュ要因があったことを著者は認めており、プル要因（つまり北朝鮮と朝鮮総連の誇大宣伝による誘引策）を無視して、プッシュ要因でしか論じないスズキの議論とは一線を画している。

帰国事業に関して、これまで必ずしも注目されなかった論点を網羅的に検証したことも評価できる。たとえば、この問題に対する韓国政府の態度や朝ソ間のやりとり、帰国を思いとどまった人々などにも光が当てられた。また、第7章の「なぜ「帰国」は四半世紀も続いたか」という謎解きは、重要論点であるにもかかわらずこれまで十分に検証されてこなかった点である。筆者は総連機関紙の記述と元活動家の証言を突き合わせて総連指導部のイニシアチブを明らかにしたほか、北朝鮮の韓国に対する体制優位宣伝が優先され、帰国対象者の選定が変容するといった運動の「質的転換」の過程も紐解いた。

地域研究のあり方をめぐる示唆点も本書には多くある。巻末の「参考文献」は、一般に存在さえ知られていない資料も数多く、圧巻であった。孫引きを一切せず、原典資料がど

の先行研究に使用されたかも率直に記している。この分野に関するロシア語・英語文献も多様に存在するが、徹底的に無駄を排して、本書執筆に実際に用いた文献のみを並べているのは筆者の学問的良心であろう。持論を展開するために有利な資料だけを紹介するようなことはしていないように見受けられ、元総連活動家や脱北者・亡命者の証言収集とその効果的な引用も高く評価できる。文書と証言の双方を突き合わせるという地道で理想的な作業によって、帰国事業の姿を立体的に再検証することに成功している。

本書の難点をあえて述べるとするならば、筆者自身も認識しているとおり、新書という媒体の性質上、「帰国問題に関する研究史の整理は、一般読者には煩雑なため割愛」されている点といえる。本研究を日朝関係史研究や北朝鮮研究の中でいかに位置付けようとしているのか、別の機会により率直な主張が展開されることを期待したい。その延長上でもあるが、先行研究や史料の重要度がわかりにくい点も指摘しておきたい。一般読者に向けて問題の内実とともに見取り図をも描こうと腐心している様が随所に垣間見られる。しかし、膨大な資料の引用に強弱をつけ、既存研究で使われなかった新資料を前面に出し、読者へのインパクトを強めても良かったのではないかと思われる。なお、細かいことではあるが、複数の人名に誤記が散見される点も惜しい。但し、いずれも本書の価値を下げるような指摘ではない。

(中央公論新社、2009年11月、新書版、258ページ、定価800円 [本体])

(いそぎき・あつひと 慶應義塾大学)